

看護学部1年生に対する禁煙指導の効果 ～禁煙継続指導の1年目の報告～

小石 真子*, 矢野 恵子, 藤田 智恵子, 大城 知恵, 糀谷 康子, 山本 明弘

明治国際医療大学看護学部看護学科地域保健看護学講座

要 旨 本研究の目的は、本学看護学部1年生に対して禁煙指導を実施したので、その効果を検証し、たばこに対する認識を把握するとともに、継続した禁煙指導について検討することである。

【対象】 本学看護学部1年生77人中のクラスアワーの出席者54人を調査対象とした。

【方法】 平成24年6月18日の禁煙講義前と講義後に自記式のアンケート調査を行った。その際の禁煙指導は専門の保健師3人によるリレー講義方式であった。

調査内容は、たばこに関しての認識と加濃式社会的ニコチン依存度質問票 (Kano Test for Social Nicotine Dependence, KTNSD) である。

【結果】 アンケート回収数48 (回収率88.9%)、有効回答数44 (有効回答率91.7%)であった。1. 禁煙指導の効果について講義前・後の比較は「禁煙教育は個人の喫煙防止に効果がある」「大学構内は禁煙にすべき」「医療従事者はたばこを吸ってはいけない」と回答した人数割合に有意差は認めなかった。2. KTSND平均値の比較は講義前が10.3 ± 5.6点、講義後が7.6 ± 6.0点であり、有意差があった ($P < 0.001$)。3. 家族内喫煙者については、学生の50.0%の家族に喫煙者がいた。

【結論】 禁煙講義には喫煙防止効果のあることが示唆された。本研究の看護学生の家族に喫煙者がいることから、家族や学生の周囲の人にも喫煙防止に取り組むことの必要性が示唆された。

Key words たばこ Tobacco, 看護学生 nursing students, 禁煙指導 non-smoking instruction, 加濃式社会的ニコチン依存度質問票 Kano Test for Social Nicotine Dependence

Received April 3, 2013; Accepted August 19, 2013

1. はじめに

受動喫煙の防止は、2003年5月1日に健康増進法が施行され、学校や病院の努力義務となっている。2006年の国民生活基礎調査では男性が39.9%、女性が10.0%の喫煙率である。しかし、日本看護協会の2006年「看護職のたばこの実態調査」報告書によると、看護職は国民の健康を守る専門職であるにも関わらず、男性が54.2%、女性が18.5%の喫煙率と高率であり、喫煙看護者に対する禁煙への支援が

検討されている現状である。

そこで、看護学部1年担当アドバイザーは平成24年度の1年生の卒業時の達成目標を「学生全員の禁煙」とし、年次ごとに禁煙・防煙教育に取り組むこととした。このことにより一個人として、また、看護職としてたばこのない社会を目指すことに貢献すると考える。

今回、本学看護学部1年生に対して禁煙指導の講義を実施したので、その効果を検証し、たばこに対する認識を把握するとともに、継続した禁煙指導について検討することを目的とした。

* 連絡先: 〒629-0392 京都府南丹市日吉町
明治国際医療大学看護学部看護学科地域保健看護学講座
E-mail: m_koishi@meiji-u.ac.jp

II. 研究方法

1. 対象

看護学部1年生77人中のクラスアワーの出席者54人を調査対象とした。

2. 禁煙指導

平成24年6月18日に禁煙指導の前と禁煙指導の後に自記式によるアンケート調査を行った。平成24年6月18日のクラスアワーにおいて禁煙指導を専門とする保健師3人による講義を1時間行った。講義内容はたばこの中身、ニコチンの害、一酸化炭素中毒の怖さ、たばこのコマーシャル方法、たばこと美容、卒煙のコツ、たばこと企業などのスライド

を用いての説明とスモーカーライザー、肺気腫モデル、喫煙による病気モデル、薬品瓶のたばこの成分、タール瓶などの実物や模型を用いての説明があった。

3. アンケート項目

①たばこへの関心、②家族内喫煙者の有無、③禁煙教育の効果、④構内禁煙や医療従事者の禁煙の必要性、⑤加濃式社会的ニコチン依存度質問票 (Kano Test for Social Nicotine Dependence, 以下 KTSND とする) とした。KTNSD は、加濃、吉井らにより研究開発され、10の質問項目からなり、「喫煙効果の過大評価 (正当化・美化・合理化) および喫煙や受動喫煙の否定」を定量評価するものであり、得点が高いほど、喫煙に対する許容が高いと評価される¹⁾。

表1 アンケートの質問内容

年齢 (歳), 性別 1 男性・2 女性,
1 タバコについてどう思うか教えてください。
(1) タバコを吸ってみたいと思いますか? 1 はい 2 どちらともいえない 3 いいえ
(2) 家族や友人がタバコを吸っていたらどうしますか?
1 やめるように注意している 2 やめてほしいけど注意できない 3 何も思わない
4 吸うのは個人の勝手なので吸えばいいと思う
(3) 家族でタバコを吸っている人がいますか? 1 いる 2 いない
いる場合はだれですか? ()
(4) 将来、家族や友人からタバコをすすめられたらどうしますか?
1 吸う 2 吸ってしまうかもしれない 3 たぶん吸わない 4 断る
(5) 医療従事者はタバコを吸ってはいけないと思いますか?
1 そう思う 2 ややそう思う 3 あまりそう思わない 4 そう思わない

表2 加濃式社会的ニコチン依存質問票

1. タバコを吸うこと自体が病気である。
(0) そう思う (1) ややそう思う (2) あまりそう思わない (3) そう思わない
2. 喫煙には文化がある。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
3. タバコは嗜好品 (しこう品: 味や刺激を楽しむ品) である。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
4. 喫煙する生活様式も尊重されてよい。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
5. 喫煙によって人生が豊かになる人もいる。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
6. タバコには効用 (からだや精神に良い作用) がある。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
7. タバコはストレスを解消する作用がある。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
8. タバコは喫煙者の頭の働きを高める。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
9. 医者はタバコの害を騒ぎすぎる。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない
10. 灰皿の置かれている場所は、喫煙できる場所である。
(3) そう思う (2) ややそう思う (1) あまりそう思わない (0) そう思わない

4. 統計解析

アンケートにおいては、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせて肯定回答として、また「あまりそう思わない」と「そう思わない」を合わせて否定回答とした。講義の前・後の禁煙教育の効果、構内禁煙や医療従事者の禁煙の必要性の肯定回答での比較に χ^2 検定を用い、また、KTNSDの平均値の比較に対応のあるt検定を用いた。解析には統計解析ソフト(PASW Statistics 18, IBM社)を使用し、有意水準を5%未満とした。

5. 倫理的配慮

事前に学生および保護者に調査の主旨と内容や倫理的配慮を口頭と紙面で説明し、同意の得られた学生にのみ無記名式のアンケートを配布し、記入後、研究者が直接回収した。なお、本研究は明治国際医療大学研究倫理委員会の承諾を得て行った(研究番号24-10-1)。

III. 結果

アンケート回収数48(回収率88.9%)、有効回答数44(有効回答率91.7%)であった。性別は女性40人、男性3人、不明1人であった。

1. 喫煙について

講義前後とも「たばこを吸ってみたいと思いますか?」の質問は「はい」1人(2.3%)、「どちらでもない」2人(4.5%)、「いいえ」41人(93.2%)であった。そして、「家族や友人からたばこをすすめられたらどうしますか?」の質問は、「たぶん吸わない」5人(11.4%)、「断る」39人(88.6%)であった。

2. 家族の喫煙について

「家族でたばこを吸っている人がいますか?」の質問は、「いる」22人(50.0%)、「いない」22人(50.0%)

であり、家族員の中では、「父親」19人(43.2%)、「兄」9人(20.9%)、「祖父」2人(4.5%)、「母親」2人(4.5%)、「姉」1人(2.3%)、であった。

講義後「家族や友人がたばこを吸っていたらどうしますか?」の質問は、「やめるように注意する」20人(45.5%)、「やめてほしいが注意できない」9人(20.5%)、「何も思わない」6人(13.6%)、「吸うのは個人の勝手だと思う」8人(18.2%)であった。

3. 禁煙教育の効果について

「禁煙教育は個人の喫煙防止に効果があるか?」の質問の講義前・後の比較では、肯定した回答は講義前26人(60.5%)、講義後33人(76.7%)であり、有意差はなかった(表3)。

4. 大学構内の禁煙について

「大学構内は禁煙にすべきだと思いますか?」の質問の講義前・後の比較では、肯定した回答は講義前27人(61.4%)、講義後29人(65.9%)であり、有意差はなかった(表3)。

5. 医療従事者の喫煙について

「医療従事者はたばこを吸ってはいけないと思いますか?」の質問の講義前・後の比較では、肯定した回答は講義前23人(53.5%)、講義後29人(67.4%)であり、有意差はなかった(表3)。

6. KTSNDについて

KTSND平均値(SD)は講義前が10.3±5.6点、講義後が7.6±6.0点であり、有意差を認めた($P < 0.001$)。

IV. 考察

本研究は看護学部1年生を対象にクラスアワーにおける禁煙教育の取り組みの一環であったが、出席

表3 禁煙指導講義前・後における質問に対する肯定回答者数の比較

質問項目	肯定回答者			統計解析
	講義前	講義後	講義前後の差	
禁煙教育は個人の喫煙防止に効果がある	26人(60.5%)	33人(76.7%)	7人(16.3%)	n.s
大学構内は禁煙にすべき	27人(61.4%)	29人(65.9%)	2人(4.6%)	n.s
医療従事者はたばこを吸ってはいけない	23人(53.3%)	29人(67.4%)	6人(14.0%)	n.s

質問に対して「そう思う」と「ややそう思う」と回答したものを肯定回答者とした。括弧内は有効回答者数に対する割合を示す。禁煙指導講義前・後の肯定回答者数の比較は χ^2 検定を用いた。

n.s: 有意差なし

者 54 人 (70.1%) であり, そのうち 44 人 (81.5%) から有効な回答を得たことから, 受講者の禁煙意識をとらえることができたと考える。

禁煙指導の講義後も喫煙の関心ありの学生は 1 人いたが, 家族や友人からたばこをすすめられても「吸う」と回答した学生はなく, 繰り返してたばこの害の知識を学生に伝えることとともに学生の周りの人々にも禁煙や防煙について情報提供することが必要と考える。

家族内喫煙者については, 学生の半数の家族に喫煙者がいて, 家族員の中では「父親」がもっとも多く 19 人 (43.2%), 「兄」がついで多く 9 人 (20.5%) であった。

そして, 喫煙している家族や友人に対して, 「禁煙をすすめる」が 20 人 (45.5%), 「禁煙をすすめたいができない」が 9 人 (20.5%) であり, これらのことから, 学生が他者に対して禁煙啓発ができるような支援をするとともに, 他者の禁煙に関心を示さない学生には健康を守る立場の看護の専門職としての意識をもたせることが必要と考える。

禁煙教育の効果については, 講義の前・後で「禁煙教育は個人の喫煙防止に効果」や「大学構内は禁煙」や「医療従事者の禁煙の必要性」について肯定回答者の割合に有意差はなかったが, 実人員の増加はあった。そして, KTSND 平均値は講義前 10.3 ± 5.6 点, 講義後 7.6 ± 6.0 点と有意差を認めたことから, 講義による禁煙教育の効果が示されたと考える。

しかし, 日本看護協会の看護者のたばこ対策の取り組みの目標として, 「看護学生は看護者の使命を自覚し, 学生自身や家族・友人・患者・地域住民をたばこの健康被害から守るために行動する」には, 看護者の専門性や倫理性の観点からの理解を深める必要があると考える。

また, 山本ら²⁾の看護学生 3 年生の調査では非喫煙者の KTSND は講義前 13.8 ± 4.7 点, 講義後 11.3 ± 5.0 点と点数の低下を示し, 看護学生 1 年生が今後も喫煙に対する許容度の低い状態を保持することが望ましいと考える。それには, 継続した支援として禁煙指導に関心のある学生と関心のない学生

に対して個別のアプローチや学生の家族に対しても喫煙防止について取り組む必要があると考える。

V. 結論

禁煙講義には喫煙防止効果のあることが示唆された。本研究の看護学生の家族に喫煙者がいることから, 家族や学生の周囲の人にも喫煙防止に取り組むことの必要性が示唆された。

謝 辞: 禁煙指導にご協力いただきました京都府南丹保健所の山下美佳保健師・川南明日香保健師ならびに NPO 京都禁煙推進研究会青木篤子保健師に感謝申し上げます。

文 献

1. Yoshii C, Kano M, Isomura T, et al: An innovative questionnaire examining psychological nicotine dependence, “The kano test for social nicotine dependence (KTNSD)” JUOE, 28: 45-55, 2006.
2. 山本明弘, 北村雄児, 柴田早苗: 看護学生における禁煙講義の効果. 明治国際医療大学誌, 6: 55-61, 2012.
3. 栗岡成人, 稲垣幸司, 吉井千春ら: 加濃式社会的ニコチン依存度調査票による女子学生のタバコに対する意識調査 (2006 年度). 日本禁煙学会雑誌, 2: 62-68, 2007.
4. 遠藤明, 加濃正人, 吉井千春ら: 高校生の喫煙に対する認識と禁煙教育の効果. 日本禁煙学会雑誌, 3: 7-10, 2008.
5. 木勢育子, 丸銭笑子, 井岡道子ら: 石川県下の全看護学生の受動喫煙に関する実態調査 (第 1 報) —喫煙状況の実態—. 北陸公衛誌, 31, 24-29, 2004.
6. 丸銭笑子, 木勢育子, 杉田千佳恵ら: 石川県下の全看護学生の受動喫煙に関する実態調査 (第 2 報) —受動喫煙による健康影響の実態—. 北陸公衛誌, 31, 30-35, 2004.